



小田実全集（小説 第6巻）

現代史（上）



講談社

小田実全集

*Makoto Oda*





この小説は、虚構による「現代史」の試みの一つである。私は、ここで、歴史の事実をことまかに述べたてようとしたのではない。私が読者に伝えようとしたのは、いわば、「現代史」のいぶきなだろう。したがって、事実とのあいだにどのような類似があろうとも、それは、むしろ、偶然の一致でしかない。私はこれから何年かを費して、こうした試みをつづけて行くであろう。

目次

第一章	6
第二章	85
第三章	189
第四章	240
第五章	380

現代史  
(上)

# 第一章

## 1

聖子が頼子の事故死のことを聞いたのは、風呂からあがって二階の客間でテレビを見ていたときだった。聖子は風呂のあとではいつも縞しまのギンガムのパジャマの上に大好きなサモン・ピンクのガウンを羽織ってそのまますぐ二階へあがると、客間で、隣りの彼女の室から持って来た携帯テレビを見る。ときにはテーブルの上の小さな卓上ランプのスイッチを入れることもあったが、たいていは電灯をつけないまま、まっくら闇のなかで彼女はテレビを見た。

二階には客間が二つあってそれぞれ聖子は好きだったが、風呂のあとで行くのは庭を見下ろす大きなほうの客間ではなくて、彼女の室の隣りの小さな予備の客間だった。そこは玄関の真上にあたっていて、ベランダに通じる大きなフランス窓からは坐っ坐っしても門が見えた。めったに使わないものだから扉を開くと心なしか儼げんくさい空気がひんやり流れて来て、それは聖子の湯上りの火照ほてった頬にかえってこころよかった。

聖子は肌が荒れ性のせいか、いつたいに乾いた空気よりもこの室のようなしめっぽい空気を好んだ。空つ風の吹きすぎぶ東京の空気よりも、どんなに晴れわたって乾燥した日でもどこかにどんよりしたものがあったよっている関西の空気が肌に合う気がするのも、あながち聖子が関西生まれの関西育ちの

せいばかりではないだろう。母も三人の姉も聖子とはちがつてあぶら性で、荒れ性の聖子をかえつてうらやんでいた。「セーちゃんはママが浮気して生みはった子やな」いちばん下の姉の恵子は、「生みはった子」の「子」を「コウ」と長く引つぱるように発音して、よくそんないやがらせの冗談を言った。母は恵子がそういった冗談を言うのと肥った全身をゆさぶるようにして笑い出し、父はいつものように眼顔で笑うのだが、そのとき、古武士のようにいかめしい父の顔つきに一瞬、神経質なかげが現われるような気がしないこともない。もし事実だったらと、ときどき聖子は思う。それがどういふことなのか自分でもさつぱり見当もつかないが、その想像はこわくて、それでいてどこかに快感がなくもなかった。

けれども、実際のところ、聖子の肌は母や姉たちがうらやむほどのこともなかった。冬の乾ききつた日など、いくら荒れ性用のクリームをつけてみても、まだまだつけ足りない気がしてならない。聖子は今から六年前、高校二年のとき、「アメリカン・ワールド・サービス」の高校生留学プログラムで一年アメリカに留学したことがあるのだが、そのときは困った。日本とちがつてアメリカの女子高校生はみんな化粧をしていて、それがたいい派手な厚化粧で、聖子もそのときはじめて化粧し始めるようになったのだが、いつたいに西洋人の女、ことにアメリカの女性の肌がいつもかさかさに乾いていて、いろんなしみが肩から腕のあたりについていたりするのは、ひとつには肌をとりまく空気が同じようにかかさきかさきつたものであるためかも知れない。聖子のいたのは、冬、乾燥することでも有名な中西部の北のほうの田舎町だった。冬の夜、くらがりのなかでナイロンのスリッパを脱ぐと火花が出たりしたが、あれはきれいで、ときどき彼女は火花が出やすいようにわざと手荒らにスリッパを脱いだ。

そのころ着ていたベージュのスリッパを聖子はまだ持つていて、いつもは下着を入れたひき出しのいちばん底にしまつてあるのだが、真夜中、みんなが寝しずまつたあとで取り出して体にあててみるものがあつた。もちろんこの上野芝では、どのように手荒らに扱つてみたところで火花の出る気づかいはなかつたが、ナイロンのすべすべした感触を肌じかに感じると、アメリカの思い出が同じようにじかに肌よみがえつてくるような気がして、ときとして聖子は涙ぐんだ。聖子はそのどこにも飾りのないシンプルなスリッパが好きで、はじめてのデートのときも、クレイトン・ハイスクールの卒業式のときも、右すそのところに小さな花のアップリケがある白のパンティとともに下着に選んだ。卒業式に卒業生全員でとつた記念写真は、アメリカから帰つて来た直後にアメリカでとつた写真の整理用にと母が買つてくれた大きなアルバムの第一頁に貼つてあるのだが、四角な帽子を頭にのつけて手に免状を持ったガウン姿の聖子は、のつぼのメアリーとジェーンにはさまれて小さくかわいく、顔はまるで泣き笑いしているように見えた。

ほかに三つ、聖子がアメリカから持ち帰つて来て、同じところにかくしてあるものがあつた。

一つは天使の羽根のように長いケープのついた薄いピンクのネグリジェで、これまで一度だけ聖子はそれを着て母の室の大きな姿見のまえに立つたことがある。ちょうど父も母も弟の和人も二人のお手伝いさんも家じゅうが出はらつていたときで、聖子は長いあいだためらつたあげく、口紅を思いきつて濃いめに刷いてからネグリジェを着た。いつも着ているパジャマとちがつて、そのナイロンのネグリジェはケープを上にはね上げると、恥ずかしいほど体が透けて見えた。

ネグリジェは、実は、彼女の花嫁の床用のものだった。クレイトンの洋品店「フェアレディ」のショウ・

ウィンドウに飾つてあつたのを通りがかりに見つけて買ったものなのだが、それをまず見つけて「あれ、いいわね」と歓声をあげたのはナンシーだった。聖子はうなずき、うなずいてから「そうでもないわ」とあわててつけ加えたのだが、それは、もうそのころには聖子がナンシーを嫌いになつていたからではなくて、ネグリジエを見たたん、とつさに買おうと心に決めていたからだろう。翌日、聖子はひとりで「フェアレディ」へ行つた。二十九ドル九十九セント。税金が十五セント。買っているあいだ、ナンシーが入つて来はしまいかと胸がどきどきした。アメリカ製だとしてつきり思っていたらそうではなくて、店の主人のあから顔の大男のジムが「輸入品だよ、お嬢さん」と誇り顔に言つた。デンマークの製品で、ラベルを見ると、コペンハーゲンの会社のものでつた。

コペンハーゲンへは聖子はまだ一度も行つたことはないが（アメリカへはまっすぐ行き、まっすぐ帰つた。ハワイへは寄つた。行きと帰りにそれぞれ一泊ずつ）、きつと、その長いケーブのように天使の羽根を思わせる街なのだろう。コペンハーゲンについて聖子の知つていることと言えば、アンデルセンとかわい人魚の像ぐらいのものだが（母がソ連の帰りにコペンハーゲンに寄つて、人魚の絵ハガキを送つて来た）、もちろん、そこは北欧の街だから真夏でも冷涼の氣にみちていて、街はひっそりとして落ちつきがあり、美しくて、清潔で、紙屑など落ちていないにちがいない。まだアメリカにいたときから聖子がひそかに心に決めていたことが一つあつて、それは新婚旅行にコペンハーゲンへ行くことだつた。その計画は彼女が交通公社から貰つてきた航空会社の時刻表によると不可能なことではなくて、たとえば、日曜か水曜の夜、スカンジナビア航空の北極経由便に乗るとすると、コペンハーゲン到着は翌朝六時〇五分。月曜、土曜の夜なら日本航空、木曜夜には西ドイツのルフ

ハンザ航空のコペンハーゲン直航便がそれぞれ出るが、せっかく北欧の地に行くのだから、やはり、スカンジナビア航空にしたいと聖子は思う。それにスカンジナビア航空にするなら、式を日曜にすることもできて、万事好都合だろう。出発は夜十時というおそい時刻なので、午後から披露宴をゆつくりやつても十分に時間の余裕はあつた。

コペンハーゲンの豪華なホテルの一室で、そのネグリジェを着て、夫の胸に抱かれ、ホテルの窓から暗い北海をじつと見る。そのあとしばらくたつて、聖子の未来の夫は天使の羽根に包まれた彼女をたくましい腕でかかると抱き上げると、無言のまま別室の花嫁の床めがけてゆつくり歩を移すのだが、そのとき、いつか見た喜劇映画の主人公のように途中でへたりこんだりは決してしないだろう。日本人の男のたいていは弱虫で妻をそんなふうに抱き上げることができない、「それが毛唐にヤマトナデシコをしてやられる理由サ」とある週刊誌に書いてあつたが、聖子の未来の夫は、まさかそんな情けない人物ではないにちがいない。しかし、そうやって花嫁の床へ運ばれること、それはどんな気持がするものだろう。聖子は恵子同様週刊誌マニアで、たいていの週刊誌に眼を通しているのだが、ことに『週刊レディ』を毎週欠かさず買うのは、グラビアの色の仕上げがきれいだというこのほかに、「新婚のあなたのためのセックスのすべて」とか「性の二十の扉」とかいった小さな色刷りの折り込み付録がついているからだつた。ほんとうにどんな気持がするものだろう。その折り込み付録にあつた通りの姿態をとつてみたことがあつた。それは一種の体操で、それをつね日ごろり返しておくと、いざというとき快感がたかまるというのだが、今度、またみんなが掛けて留守になることがあつたら、ネグリジェを着て、ベッドに横になつて、頭からシーツをかぶつて（そうでもしない

と、とても恥ずかしくて出来にくい気がする)、思いきりさまざまなかつこうをしてみたと思うこともあった。「なんでもあらへん。すぐ、すんでしもうた」恵子がいつか二人きりで話していたとき言った。話をもちかけたのは聖子で、彼女は「恵ちゃんの新婚旅行では……」という切り出しのことばだけで真赤になつてしまひながら遠まわしに訊ねたのだが、恵子は拍子ぬけするくらいにさばさば答えた。「痛かつた?」「すこしね」その問答のあとで、実は新婚旅行のときがはじめてではなかつたのだというおどろくべき事実を、恵子はあいかわらず何気ない口調で打ち明けた。相手はもちろん義彦で、見合いしてから結婚までの四か月のあいだに彼が「しんぼうできんようになつた」のだという。「私には魅力がありますもんね」恵子は一昨年八月、二人目(男の子で、透と言つた。母親に似て大きなおでこで、通称、でこちゃん。上は今年小学校に入った女の子で純子、彼女は父親似で、眼が大きくかわいかつた)を生んでからめつきり肉づきのよくなつた腰のあたりに手をあてて、軽くしなをつくるようにしながら笑つた。「セーちゃんも魅力があたりですよつて、用心せんとあかん」「どこで……」聖子はそのことをどのようなことばを使って言いあらわしてよいのか判らなくなつて口ごもつた。「……しはつたん」「さあ、どこでやるか。……案外、このうちのなかかも判らへん」恵子ははぐらかすように言つてまた笑つた。

もちろん恵子の四か月の婚約期間のあいだ義彦が訪ねて来たときには母がいつもいつしよにいて、ときにはまだ高校生だつた聖子までひっぱり出されて客間で夜おそくまで話し込んだこともあつたから、「このうちのなか」ではまず不可能なことだつたにちがいない。とすると、聖子の頭にまずひらめくのは毎日通学の途次、阪急電車で大阪から十三じゅうそうに近づくとともに淀川の鉄橋ごしに見えて来て、

いやおうなしに彼女の眼がそこに吸いつけられて行く色とりどりのネオンサインの看板の列なのだが、義彦と恵子はそうしたネオンサインのひとつ、たとえば、ひときわ高く目立って聖子の意識に焼きついたように残っている「ホテル・エデン」の六文字の下に姿を消したのだったろうか。そのさまを想像すると、まるで自分のことであるかのように聖子の全身はひとりでに熱くなつてくるのだが、ときどき思いがけないことを平気でやつてのける恵子のことだったから、そんなこともほんとうにあつたのかも知れない。それとも、聖子がネグリジエを着たときのように、留守をみはからつて義彦がしのび込んだのではないか。その想像のほうがロマンチックで聖子の好みにあうような気がして、大学院の清水教授のゼミナールで実際に『ロミオとジュリエット』を読んでいる彼女は、下調べにあきるときまつてそうした空想にふけた。しかし義彦も恵子も最近ではめつきり肉づきがよくなつてしまつて、そのロマンチックな想像も滑稽でなくもなかつた。結婚前の恵子は聖子のように痩せつぽちで、義彦も、彼が笑いながらいつも言うことだが、「東大大学院博士課程在学の博士候補者」らしく痩せていた。もつとも痩せてはいたが、全身がいかにも生氣に満ちあふれた感じで、その点では並みの「博士候補者」とはちがつていたに相違ない。それが結婚して、やがて純子が生まれて、そのあとアメリカへ行ってハーバード大学の所在するマサチューセッツ州のケンブリッジで暮しているあいだに「あんまり、二人して精出してアイスクリーム食べたからや」と恵子は自分で言つて笑うのだが、たしかに、昔と今の二人を比べると、肥る薬の「服用前」「服用後」の二枚の宣伝写真のように見えた。義彦にも、ときどき神経質に動くこめかみのあたりにかつての瘦身の秀才らしい風貌は残つていても、ポストンで中華料理店の支配人にまちがえられたというくらい全身に貫禄がついていた。恵子の説に

よると、アメリカ人の肥り方は日本人とはちがつていて、日本人の場合は下腹が出ぼってふくれ上るという感じの肥り方なのだが（桃谷に住むいちばん上の姉の伸子の夫の重治がいい例だと恵子は指摘した）、アメリカ人の場合はちがう。全身に満遍なくしつかり肉がついて、こりこりしたまるい感じになる。「やつぱし、ご飯とアイスクリームのちがいやね」恵子は結論するように言うのだが、その彼女の説にしたがうと、義彦の場合は、まさにアメリカ人のような肥り方だった。すくなくとも、ニューヨークやシカゴのような大都会の中華街で出会う中国系アメリカ人の肥り方であった。聖子がハワイで会った二世、三世たちにも、そんなのがいた。

けれども、アメリカに一年いて、そのあいだに彼女もアイスクリームを精出してなめたのに聖子が一向に肥らなかつたのは、恵子の言う通り、結婚までは痩せつぼちで結婚後急速に肥りだすという島内家の家系に起因することかも知れない。

「みんな、そうとちがう？ ママがそうやし、伸子姉さん、良ちゃんもそうやし……」母と二人の姉をひきあいに出してから、彼女は親類の誰彼をリストにつけ加える。遠山の伯母。京極の叔母。従姉妹の佐々木の葉ちゃん。「セーちゃんもわるいけど、例外とちがうと思うけど」

聖子は恵子とお風呂へ二人で入ったとき、そなえつけの台秤で体重をはかりあつたことがある。そのときには聖子が四十三キロちよつと、恵子が五十一キロもあつた。恵子も結婚前は四十三、四キロだったというから、六、七キロも結婚後に増えたことになるのだが、聖子もいつかはそうなるのだろうか。恵子は長身の聖子よりもずっと背が低くて、二人で並んで立つと彼女の背は聖子の耳までしかなかつたが、おそろいで阪急で買った裾にこまかな花の刺繍のあるフランス製のスリッパを身につけ

て台秤の上のつた恵子のまるみをおびた腰のあたりに、聖子は恥ずかしげに眼をやつて、何故ともなく赤面した。そんな彼女を素知らぬげに、恵子は最近また義彦がある綜合雑誌に書いた「現実的地より日中關係を論ず」という論文が朝日新聞の論壇時評に顔写真入りで大きくとり上げられたというニュースを得意顔にしゃべりつづけていた。「そやけど、ジャーナリズムであんまり騒がれるようになる……」台秤からピョンと勢いをつけるようにして降りながら、恵子はそれが癖の一種間のびのした口調で言つた。「学者の世界ではあんまり出世できんようになるんとかがうかしら。……セーちゃんの大学の先生にも、そんな人いやはるんとちがう？」聖子は「ふん、ふん」と上の空で返事をして、ワンピースを頭から乱暴にひきかぶつた。

ネグリジェのほかに、聖子がアメリカから持つて来てひき出しの底にかくしてしまつてあるのは、厚手の男物のシャツと電気剃刀だつた。二つともクリスマスの休暇にニューヨークに出たときに買ったものだが、その買物をしたのは、折よく父の会社のニューヨーク支店長の小畑さんに急用ができて、小畑さんの部下の若い男の人がついて来たときだつたから、「弟へ買つてやるんです」という嘘をこだわりなく言うことができた。買ったのはどちらもロックフェラー・センターの地下の商店街で、二つの買物を終えて出て来たときにはもう暗くなつていて、ロックフェラー・センターの中心のスケート・リンクのそばに立てられた大きなクリスマス・ツリーに色とりどりの灯がついていて、それがとてもきれいだった。

シャツはアメリカ製でアメリカのものらしく野暮つたいがどつしりと厚みのある感じで、そのシャツの厚み、重みは、コペンハーゲンのホテルでネグリジェを着た聖子がよりかかつて行く厚い胸の持

ち主にびったりしていることだろう。結婚式も終り、披露宴もどこおりなくすんで二人きりになったところで、それは、つまり、S A S—スキャンジナビア航空のジェット機の座席に落ちついたときのことだが、聖子はしずかに微笑しながらシャツを包んだ紙包みを彼に手わたすだろうが、そのとき、彼女の顔にはほんのりと赤味がさしているにちがいない。そして、コペンハーゲンのホテルに落ちついてから、聖子は電気剃刀を彼にわたすのだが、いちばんいいタイミングは、そのぶあついシャツを着込んだ彼がいざ髭をそろうとしてトイレットに消えようとする寸前だろう。彼の髭はもちろん濃く、抱きよせられると聖子の頬は痛くて、そうした髭には日本製の電気剃刀は齒が立たないにちがいない。ときどき彼女はひき出しの底から電気剃刀を取り出して動かしてみた。スイッチを入れるといつでもブーンと軽快な音がして、ここちよく剃刀は動いた。一度そんなふうにしてぼんやりしていたら、和人がドアにノックもしないで入って来た。聖子はあわてて電気剃刀を机の下にかくして、「和ちゃん、人の室に入るときにはノックせんとあかへんで」とたしなめたが、和人は返事もしないでそのまま出て行ってしまった。

東大受験に失敗して予備校に通い出したところから、和人はいつもそんなふうに反抗的な態度をとるようになった。それほど受験の失敗が身にこたえたのだろうか、昔は、和人ほど従順でやさしい弟はいないと聖子は思っていたのだ。聖子が高校二年のときに「アメリカン・ライルド・サーピス A・F・S」高校生留学のプログラムの試験に合格してアメリカに行ったところ、和人は彼女のことをほとんど英雄のように尊敬していて、一週に一度、彼女にまるでファン・レターか幼い恋文のような手紙を書き送った。聖子も二度に一度は弟の熱情にこたえていて、二人の心は十分に通じ合っていた。クリスマスには、休暇中ずつ

とやつかいになっていたクイーンズの小畑さんのアパート気付でクリスマス・プレゼントがとどいた。水玉模様の絹のスカートで、「セーちゃん、クリスマスの本場アメリカでのクリスマスお目出とう。僕のプレゼントです。僕もがんばりますから、セーちゃんもがんばって下さい。和人」と、そえられていた小さなカードにあった。カードの裏には、いつか手紙で教えてやったキッスのしるしの「X」がいくつも書きつらねてあつて、それを見ているうちに聖子はいつのまにか涙ぐんでいた。

聖子から和人へのクリスマスのプレゼントは、インディアンがはくモカシン・シューズだった。やわらかい皮の手づくりのつつかけ靴で、聖子が羽田へ帰り着いたとき、和人はわざわざそれをはいて迎えに来ていた。あとで母から聞くと、まさかそんな靴で大阪から東京まで行くわけにいかなかったからモカシン・シューズはスーツケースにつめて来て空港ではきかえたそうだが、聖子が飛行機から降りて来ると「セーちゃん！」という呼び声が上のフィンガーから聞えてきて、顔を上げると、母と和人と父の秘書の一人の木村さんがそこにいて、和人は彼女の名を呼びながら片足を高く上げてモカシン・シューズを見せた。

それからも散歩にいつしよに出るときなど、彼はモカシン・シューズをはき、聖子は聖子で水玉模様の絹のスカートを首にまきつけたものだが、そういう習慣もいつしなくなってしまった。受験に失敗して以来というものはまるつきり出不精になってしまつていて、聖子が声をかけても十度に一度も応じようとしなない。そして、それとともに、スカートもどこかに消えてしまった。まえのお手伝いさんの山下君（と、男の子のような色の黒い高知から来た少女のことを聖子と恵子は呼んでいて、おしまいには母までときどきそんなふうと呼んだ）が半年ほど前に母の急病でひまをとつて国に帰る

ことになったとき、聖子はあわてて自分の不要になったスエーターやアクセサリイの類をとりまとめて彼女に手渡したのだが、そこにとりまぎれて入っていたのかも知れない。和人のほうも和人で、聖子は彼がモカシン・シューズをはいている姿をもう見かけたことはなかった。

風呂のあと、二階の客間のまっくら闇のなかでひとりテレビを見るという風変りな習慣を聖子が始めたのは、この夏、ソニーの新しい携帯テレビをデザインの美しさにひかれて買ってからのことだったから、まだ三月とたつていないのだが、ずっと以前からこの習性をもちつづけてきているような気がしてならないのは、よほどそれが気に入っているからなのだろう。まっくら闇のなかで、寝椅子の上を思いきり両脚をのばして坐り、そばのテーブルの上にテレビをおく。その姿勢は彼女の好きな姿勢で、そうしているとほんとうにくつろいだ気分になる。電気を消したままでもテレビの画面の明るさとフランス窓から入って来る門のわきの大きな水銀灯の光で、サモン・ピンクのガウンに包まれた彼女の全身は、くらがりのなかにやわらかく浮かび上って見えた。足には大きなボウのついた部屋ばきをはいて、エジプト製だという黒と赤のダンダラ縞のストウールの上にのせる。ときどき、彼女は足をばたばたさせた。一度など、はずみで部屋ばきがとび、壁にあたって大きな音をたてた。そのときはひやりとしたが、ふつうはテレビの音量をできるかぎり小さくしぼって、ときにはイヤホーンを使ったりするから、誰も聖子がそこでそんなふうにして携帯テレビに見入っているとは思わないだろう。聖子はその小さな秘密を気に入っていて、最近のようにめつきり寒く、半時間もたつと湯ぎめしてくるようになって、がまんして火の気一つないまっくら闇のなかで坐っている。もう少ししたらこの予備の客間にも電気ストーブがそなえつけられるだろうが、それまでどんなに寒くなくても彼女

は耐える気でいた。

このあいだまでオリンピック、オリンピックで日が暮れて、恵子のことばを借りると「バカみたい」（それでいて、恵子も聖子も熱心にオリンピック番組を見た）だったテレビだが、ふつう、テレビで聖子が見るのは、まず、ドラマだった。外国物のテレビ・ドラマより彼女は日本のものが好きで、笑われるかも知れないが（友人には言ったことはない）とりわけ時代物が好きだった。民放のよりはやはりNHKのものがよくて、義彦によく「きみの意識はおくれているな」とからかわれたりするのだが、お金が十分にかけてあるせいだろう、キャストも豪華で、それだけでNHKのほうがすぐれている。母も三人の姉たちもNHKが好きで、義彦は同じことばを使ってみんなをからかうのだが、義彦だってNHKに出演する話があれば、ほかの民放のときのように決してことわったりしないと恵子が告げ口してくれたことがある。

テレビ・ドラマがなければ、聖子は海外のドキュメンタリー映画にチャンネルを合わせた。事件のドキュメンタリーではなくて、たとえば、「アラスカの風物詩」といったような、NHKでいえば「海外特別報道班」が出かけてつくってきた旅行のドキュメンタリー映画なのだが、NHKでも民放のでも、そうしたドキュメンタリー映画を見ていると、ふしぎにアメリカにいたときのことか思い出されてきた。テレビの小さな画面に映し出されているのがパリのシャンゼリゼであろうと、アフガニスタンの荒野であろうと、どういうわけからなのだろうか、画面の映像と二重写しのようになって聖子の意識に浮かび上ってくるのは、たとえば、クレイトン・ハイスクールの校舎や校庭、あるいは、そのクレイトンというデトロイト郊外の自動車会社の幹部社員の家がたち並ぶ瀟洒な小都会のたたずま

いで、もう一度行ってみてもいいな、とときどき彼女は思った。行くなら、もちろん、新婚旅行の途中で、コペンハーゲンからの帰りに少しまわり道して寄ってくればいいのだが、ナンシーのところに泊まるのもうごめんだった。彼女は一度結婚してニューヨークに二年ほどいて、一年ほどまえ離婚し、またクレイトンの両親の家に戻って来ていたが、このところ手紙が来るのがとだえているのは、新しい相手を見つけたしるしなのかも知れない。彼女は焼きもちやきで、聖子が夫とともに現われたりすると、そのとき自分に相手がいなければ昔のようにまた意地悪をするにきまつていた。

テレビ・ドラマも海外ドキュメンタリー映画もないときに聖子がチャンネルを合わせるのは、教養番組だった。経済の話は眠くなるが、がまんして聴く。いつかそうしていたら、父の顔が突然画面に出て来たのにびつくりした。「政経分離の現在と未来」という番組のなかに短かいインタビューがあった。インタビューを受けているのが父だったのである。聞き手のほうもときどき家にやって来る日本経済新聞の人だったが、知っている人の顔をテレビで見るのは奇妙なものだ。父は話しながら少し上眼づかいに視線をそらすようにして微笑し、それはそれでまぎれもなく父のいつものやさしい微笑にちがいがなかったが、それでいて、いつもとはちがつて、聖子がそれを独占しているわけではない。そのとき感じた奇妙な感情は、義彦にあとでそれを話すと、「セーちゃんは、つまり、大衆、テレビを観る大衆に焼きもちをやいたわけだ」と説明をつけたのだが、その説明もひよつとすると当たっているかも知れない。何か父が自分の手のとどかない遠いところに、誰か見知らぬ人の手で連れ去られてしまったというような感じであった。義彦も最近よくテレビに出て、恵子の言い方をすると「まるで痴漢みたい」にいつもにやにやしているそうだが、残念なことに聖子はいつもその痴漢ぶりを見るチャ

ンスを逸して、そのとき自分がどんな感じにとらわれるのかまだ判らないでいるのだが、恵子はそうした奇妙なさびしさに悩まされることはないのだろうか。こんなことを訊ねると、また、「さびしがりやのおセンチさん」と彼女にからかわれそうなので黙っているのだが、一度、聖子は恵子にそのことを訊ねたい気持でいた。

実際、テレビというものはふしぎなもので、逆に、いつも画面で見なれている人に街で会ったりすると、まるで知人にでもばったり出会ったような気がする。桃谷の伸子の家から少し歩いたところに漫才師の楽苦郎が建てたマンション風の高級アパートがあるが、いつだったか、その前で楽苦郎に出会って思わずおじぎをしてしまったことがあった。おじぎをしてしまっただけから気がついて聖子は全身が火照ったが、彼はもうそんなことには馴れっこになっているのにはちがいない、軽く会釈を返したが、それは変に威張ったものに見えてあまり感じがよくなかった。聖子が一時ほど楽苦郎が好きでなくなつたのも、そのあとで週刊誌ですっぱぬかれた離婚事件のせいではなくて、おそらくそのこともあつたのだろう、母と昼食を食べているときなどにテレビに彼が出てきても、わざわざチャンネルをまわして別の番組に切りかえることもあつて、母が「どうしはつたん」といぶかしんだ。

教養番組で好きなのは、遠山定とか大川五郎とか、そういったジャーナリズムで活躍している若手の作家、評論家が出る番組で、そんなときにはテレビ・ドラマも海外ドキュメンタリー映画もやめにして、そつちのほうに聖子はチャンネルを合わせた。ことに聖子は遠山定が好きで、彼は美男子というのではなく顔が不釣合いに大きすぎる感じで、その点からは落第だったが、かけている太い枠のメガネと、いつでも額に落ちかかってくる長い髪の毛がよく、それがすべてを救っていた。姉の恵子も

聖子ほどではないが遠山定のファンで、「あの髪はわざと落ちるようにしてはるのとちがうやろか」と二人でテレビを見ながらよくそんなへらず口を叩き合っていた。

聖子は彼の小説は芥川賞受賞作の『寂しさのひとり』しか読んだことがなかったが、さすがに週刊誌の愛読者だけあって、たとえば、いま彼は書き下ろし長篇小説の執筆のために東京都内のホテルに「カンヅメ」になっているのだが、それが愛妻家の彼にとつてどんなにたいへんなことか、三日に一度は家でさびしく待つ夫人のために花束をとどけさせている（「さすがに『寂しさのひとり』の著者だけある」とその情報をのせたゴシップ欄に書いてあった）というようなことを知っていた。芥川賞をもらったのが今から数年前、まだ大学の学生だったときで、生まれは東京、夫人は高名な医者のお嬢で、今年四歳になるかわいい女の子が二人のあいだにいる。テレビには比較的よく出て来て、「戦後民主主義の問題点」とか「八月十五日特集」とかそういつた番組で、ややかんだかい声で早口でしゃべった。大学は東大。専攻は仏文。卒業論文はアルベール・カミュ。

聖子に頼子の事故死を電話で知らせたのは、潮田さつきだった。さつきは元来は恵子の同級生で友人だったのだが、彼女もまた「A・F・S」の留学生で、聖子より数年前に一年間アメリカに留学したことがある上に、家がすぐ近所で、堺の上野芝から大阪を通つて六甲山のふもとの六甲学院まで通う仲間のひとりだったから（頼子も六甲学院に在学していたときは上野芝にいて、卒業後、大阪市内の帝塚山へ移った）、聖子とも親しくしていた。ピアノがうまくて、学園祭ともなれば学内の演奏会に必ず顔を出す「レギュラー」（と聖子たちは呼んでいた）の一人で、高校部を出るとそのまま大学

部の音楽部へ進学するのかと思つたら、家の反対を押しきつて東京へ出て早稲田の仏文へ行つた。家とは絶縁状態のようになっていて、内々は母親が少し仕送りしていたらしいが、どこかのキャバレエでピアノを叩いていた彼女を見かけた人があるというくらいいろいろなアルバイトをしてほとんど自活していた。早稲田を出るとすぐNHKの音楽部に入り、入つたかと思うと同じ部の人と恋愛して結婚、結婚したと思つたら別れて、今年三つになる洋ちゃんが生まれたのは離婚して半年もあつたことだつた。どうして別れたのか、さつきは口をとぎして語らないが、恵子がさつきの親類筋にあたる人からそれとなく聞き出してきた情報によると、彼女が妊娠したとき、夫がさつきのおなかの子を自分の子でないかのように疑つたからだという、およそ聖子などには想像もつかない話であつた。別れるとすぐ上司に頼んで大阪のNHKに転勤させてもらい、東京から上野芝の自宅へ帰つて来て洋を生むとすぐ、NHKをやめて大阪の民間テレビに入った。同じように音楽部の仕事だが、機構が小さいだけに、さつきはあまり仕事の話をしなないたちなのでくわしいことは判らないが、いろんな番組を手伝っているらしかつた。

頼子をさつきに紹介したのは聖子だつた。頼子——貴鳥頼子は聖子の六甲学院中学部時代からの同級生で、高校部、大学部英文科とずっといっしょだつたし、しょつちゅうおたがいの家に往き来しあつて、そのうちおたがいの弟（頼子の弟の貴鳥誠のほうが和人より三歳年長だつた）までが仲よくするようになつてきて、恵子が「あんたたち、エスやねえ」とからかうほどの仲だつた。それが大学を出て聖子が「とにかくあと二年だけ」と母にせがんで父には事後承諾のかたちで大阪の国立大学の大学院に入り、頼子が大学院へもお勤めにも行かないでそのまま花嫁修業に入り、それとともに彼女の一

家が急に帝塚山へ転居したこともあって、いつのまにか往き来が絶えてしまって、それでもう半年が経つ。弟の和人のほうは、頼子の弟の誠が防衛大学校に入つて小原台へ移つてからも、かなり親しいつきあいをつけているらしいのに、かんじんの姉たちのほうは、たしかに昔ほどのつきあいではもうなくなつていた。しかし、べつに二人ともおたがいが厭になつたというのでもなく、ときどき思い出したように電話がかかつてくる。かかつてくると母を呆れさせるぐらい長話をして、最後には「今度はぜひ会いましょう」で終り、そのときにはほんとうにその気になつて言うのだが、約束の日になると、聖子の母の体具合が急にわるくなつたり、頼子にのつびきならない急用がきたりする。そんなことが数度あつて、そのうちそうした長電話もなくなり、聖子が彼女に最後に会つたのは、二月ほどまえに神戸のオリエンタル・ホテルで開かれた同窓会のお茶の会の席だった。それもほんの短かい時間で、頼子は一時間もおくれれて来て、会がすんだあとで、「どつかで軽いお食事して行かへん」と聖子が誘つたのをふりきつて帰つて行つてしまつた。それでもお茶の会のあいだは聖子のそばに、つきつきのようにして坐つて、つい半年か一年前のことを遠い昔の出来事のようなつつかしげに話していた。それはほんとうに楽しいひとときで、学院時代に返つたような気が聖子にはしたのだが、頼子はどうだったのだろうか。会がすんで聖子が食事に誘つたとき、「そうやなア」と考え込むようにして言い、それからハンドバッグにつけたアクセサリ兼用の小さな金時計を見て、「もうおそいよつて今度にするわ。これから約束があつて行かんならんねん」と、ほんとうに残念そうな声を出したのを見ると、やはり同じ思いだったのではないか。「それじゃあ、また今度ね」二人は同じことばを同じ瞬間に言つて、ホテルのまえで学院時代のように大げさに手をふつて別れた。聖子はそのあとホテル

に残り、頼子はそのままタクシーに乗ってどこかへ行ってしまったのだが、学院時代のように「どこに行きはるねん。さては秘密のデイトやな」と気軽に訊ねられなかったのは、やはり、聖子がすでに見えない壁のようなものを二人のあいだに感じていたということかも知れない。頼子はその日大きなリボンのついた赤いパンプスをはいていて、それはかなり派手な靴だから目立った。また、彼女のすんなりした形のよい脚によく似合っていて、その靴のことはそのあとずっと聖子の記憶に残っていた。白状してしまえば、一週間ほど経ったある日、聖子は彼女がその靴を手に入れたという心齋橋の裏通りの靴屋にまで出かけてみたのだが、もうその靴はなかった。いや、その小さな靴屋は「うちはそんな靴おいたことおまへん」とふしぎそうに言い、聖子は狐につままれたような気持で家に帰ったのだが、あれは靴屋か頼子のどちらかの思いちがいなのか、それとも、ひよつとすると頼子が聖子と同じ靴をはかれるのを防ぐためにそんな出まかせを言ったのではないかと、聖子はそのあとしばらく思いまどった。

二人が大学部を出て六甲学院を離れてからは、梅田のさつきの会社の近くに頼子のお花の先生が住んでいたこともあって、さつきのほうが頼子によく会っていらしかった。聖子はさつきともしょっちゅう会っていたわけではないが、日曜の夕方など、ルーシーを連れての散歩のおり彼女の家のまえを通りかかると、子供好きの聖子はいつもふいに洋ちゃんに会いたくなつて、蔦かずらのからみついたさつきの家の門柱の呼鈴を押した。三度に一度は、会うたびに「忙しい、忙しい、日曜もへつたくれもあらへんわ」と口癖のように言うさつきも在宅していて、庭の芝生に洋ちゃんをなかにはさんで坐って世間話をしながら小一時間をすごす。頼子のこと話題に出るのもそういつたなんでもない世

間話のなかで、それも、このあいだ社の近くの喫茶店でお茶を飲んだというたぐいの話で、耳新しいことは何一つなかった。いったいにさつきは友人のゴシップについては口数のすくない女で、聖子のほうもそれを知っているものだから、たとえば、頼ちゃんにいま縁談がもち上っているかどうかというような聖子がいちばん聞きたいことはもち出せないのだった。そのためだろう、そうした世間話の小一時間のあと、聖子はいつも軽い苛らだちをおぼえながらさつきと別れた。

さつきの電話があつて、そのときちょうど電話のそばにいたらしい和人が大声をあげて階下から聖子の名を呼び、聖子があわてて立ち上つてテレビを消した瞬間、彼女の眼に斬り込むようにしてあざやかに入つて来たのは、それまで見ていた推理劇の一場面ではなくて自動車のコマーシャルだった。新しい型の小型車が突然画面に出てきて、それがたぶん名神高速道路らしいハイウェイをまるで画面を突き切るようにして走つた。聖子はぼんやりと、ベレットよりこちらのほうがいいかなと思ひ、そのときもちろんコマーシャルが車の性能を告げ、音楽も鳴っていたのにちがいないのだが、それはまるつきり記憶していない。よくおぼえているのは、テレビを消して車の姿が消えたときのその消え方だった。あまりにも突然で、ハイウェイからどこか谷間へ転落したものとしか見えない。聖子は思わずギクリとしてそのまま下へ降りて行き、玄関わきの電話の受話器を手にとると、受話器の底から遠くひびくようにして聞えて来たのは、頼子の事故死を告げるさつきの低い声だった。

もともと、さつきの声は低くて、昔はよく宝塚少女歌劇の男役の真似をして聖子たちを笑わせたものだが、ふだんより一層低く、押し殺した声でさつきは話した。

「セーちゃん、びつくりしたらあかへんよ。……頼ちゃんがなあ、あんなあ、死にはつてん。……自

動車で衝突しはって……」

潮田さつきのことばを聞いたとき、聖子の心に浮かんでは頼子の顔ではなかった。先刻のテレビの画面に突然躍り出るようにして現われ、一直線にハイウェイを突き切ったかと思うと、また忽然と消えた小型自動車の姿が、聖子の心の画面に同じような現われ方をして、また消えた。そういうのを虫の知らせというのだろうか、聖子はさつきのことばのなかばで廊下の板の間にそのまましゃがみ込んでしまっていた。

事故は三時間まえに第二阪神国道で起こったのだという。神戸の方向から彼女は愛用のヒルマンを飛ばして来て、尼崎市内で事故にあった。そのあたりは工場的大型トラック、ダンプカーが多くて、聖子も神戸へ車で行くときに何度か経験したことだが、彼女のよような若い女性がベレットのような瀟洒な車を運転していたりすると、わざわざ寄って来るようなやがらせをしたりする。おまけに国道から海岸にかけて建ちならぶ大小さまざまな工場の煙突が吐き出す煤煙で空はいつもどんよりと曇り、ところによると亜硫酸ガスの臭いがいちめんにたちこめていて、無意識に一刻でも早く通り抜きたいと焦っているのだろう、そこを通るときアクセルを踏む聖子の足には思わず知らず力が入っていた。夕方のラッシュ・アワーという最悪の時刻に神戸方向から大阪へ帰ろうとした頼子の場合も同じだったかも知れない。早く通り抜けようとする焦りが彼女を危険な追い越しに駆りたて、あげくのはて、背後の大型トラックに追突される羽目になってしまった。

病院へ運び込まれたときはまだ息があつたと、さつきは説明した。

「一時間ぐらいやけど、生きてはつたらしい。そやけど、もう意識はなかつたらしくて、私が病院へ

行ったときは、もう駄目……繃帯につつまれてはって、顔も見えんくらいやった……もしもし、セーちゃん、聞える？ 聞いたはる？ もし、もし……」

悲しいというよりこわくて、聖子は廊下の板の間にうずくまったまま、ただふるえていた。涙が鼻のなかに入って息苦しい。こらえきれなくなつて聖子は大きな咳をした。その声を受話器を通して耳にしたにちがいない、さつきはまたつづけた。

「要するに、どつちもスピードの出しすぎやねん。追突した車の運ちゃんもえらい飛ばしたらしいわ。それも病院に来てはつたけど、まだ若い子で、気が動転してしもうて。……その子も怪我したんやけど、これはたいしたことないらしいの。尼崎の工場の車やねんて。……そやけど、あつちかつてスピード出しすぎてたんやから、なにも頼ちゃんだけがわるいことあらへん。警察かつて、これはどつちにも責任あることや言うてるらしいけど。……もつとも、そんなこといくら言うてもろうたかて、死んだ人間が生き返ることもないわけでしょ。ほんまに、もう、私、車を動かすのん、こわくなつてしまつたわ。セーちゃんも気をつけんと、頼ちゃんみたになつてしまふよつて。……そやけど、頼ちゃん、ほんまのこと言うたら、死んでしまはつて、かえつてよかつたかも知れへんの。頭をぶつつけてはつたし、それにお医者さんもはつきり言いはらんらしいけど、顔がめちゃくちゃになつて、鼻なんか……」

「もう、やめて！」

自分の顔がふいに血まみれになつたような気がして、聖子は自分でもおどろくほどの大声を出した。

「お願いやから……」

聖子は懇願するような弱々しい口調でくり返した。

「もうやめて、ね、さつきちゃん」

さつきはようやく黙った。さつきが黙ると受話器の底から、沈黙が押し上ってくるようにして聖子の耳に入ってきた。それともそれは、さつきの押し殺した息づかいなのかも知れない。沈黙は沈黙でありながら声をもつていて、聖子はかぎりなくこわかった。こんなふうになっていると私だつて死んでしまう、彼女はそんなふうには叫び出したい気持でふるえていた。寒くて、むやみに寒くて、どこへでもいい、あたたかいたいところへ行つて、このまますべてを忘れて眠つてしまいたい。

「お葬式は……」

さつきがそれまでの奇妙に浮かれたような上ずつた間のびのした口調とはちがつて、いつもの事務的な乾いた口調で早口に話しはじめた。その口調は、いつもならどことなく聖子の神経にひつかかるのだが、今日のかえつて救いで、聖子は電話の横のテーブルの大きな花瓶の薔薇に視線をすえながら、外国語を聞くときのように不自然に緊張した表情でさつきのことを一語一語ききとつていた。

「あさつて、二時から、おうちで。……今夜はお通夜だけど、身内だけでやりはるので、私は遠慮させてもらおう思うてるんやけど、セーちゃんも行きはれへんやろ。もうおそいよつて……そう、明日は友引きで日がわるいよつて、今夜、お通夜やつてしまいはるらしいの」

それだけ一息に早口にまくしたてるように言つて、さつきは一瞬大きく息をのみ込むようにしてこゝとばを切り（聖子はそうしたとき、さつきがいつもする大きく眼を見ひらいたような表情を電話の一方のはしに想像した）、それからふと思いついたように「じゃあ、またね」と唐突に言つて一方的に

電話を切ったが、その電話の切り方は、まさにいつものさつきで、聖子があわてて「さよなら」を言ったときには、ことば半ばで電話は切れていた。

それからどのくらいの時間のあいだ聖子は板の間にうずくまっていたのだろう、母が大声を出して彼女を呼ばなかつたら、聖子はいつまでもそこにそうして動かないでいたにちがいない。母は三度彼女の名を呼び、聖子は三度目によく心を決めて涙をふきながら立ち上ったが、立ち上ってから思ったより身軽に自分の体は動いた。

「長い電話やったのね。誰からでしたの？」

居間に入って行くと母はまっすぐに聖子を見た。聖子以上に寒がりの母は大きな電気ストーブを背に坐っていて、その熱気が正面から聖子の頬にあたった。

「風邪ひくんやない、氣イつけんと……」

「さっちゃんからやったん。……あのねえ、ママ、頼ちゃんがねえ、死にはったん」

聖子がつさに心に描いた光景は、そのまま倒れかかって母のやわらかい膝にむしゃぶりつき、思う存分泣きじゃくる光景だった。その光景をテレビか何かで聖子はこれまでに何度も見かけたような気がした。「死にはったん、死にはったん」とくり返しながら幼児のように手足をばたばたさせる。母の膝はやわらかいが、どつしりと重くて、聖子の体の重み、悲しみの重みを確実に受けとめてくれる。しかし、それはテレビ・ドラマのなかでの光景であって現実の光景ではないだろう。聖子は自分でもそれをよく知っていて、その光景を心の奥底に深くしまい込むような姿勢で母のまえに坐った。

母は黙ってお茶を入れた。

こんなとき母が入れるお茶は番茶で、聖子もいつのまにかそうした母の習慣が移ったらしくて、夜ひとりでいるときなど、むしろように番茶が飲みたくなることがあった。

「それ、この夏の指環？」

「そう」

八月三日の母の誕生日に父はスター・サファイアの指環を母のために買った。買ったのは大丸の宝石部からだ、石を選んだのは父の大阪本社の社長室でだった。ほんとうは母もうすうす感づいているかも知れないが、選んだのは父ではなくて聖子である。その日の朝、会社の父から急に電話がかかってきて聖子に話があるから来てくれという。すぐベレットを自分で運転して出かけたのだが、それはもうお見合いの話にちがいないと車のなかで聖子は考えつづけ、体をかたくして、おかげで途中もう少しで信号違反をやるどころだった。社長室に着いて父から、「大丸の宝石部の人をよんであるからな、ママのために選んで欲しいんだ」と言われたとき、何やら安堵したのと同時に軽い失望に似た気持ちを味わったのは、やはり、聖子はお見合いの話を中心に期待していたのかも知れない。大学四年のとき、聖子は何枚かお見合いの候補者の履歴書を見せられたことがあった。なかには「資産五億円」と書いたのまであって、それは最近東京都内に十五階建とかのホテルを建てて話題をふりまいている新興成金の三男の履歴書だったが、そうしたもののばかり多くてまともに相手になる資格の者はいなかったのか、それとも、それから彼女が学院を卒業後大阪の国立大学の大学院に行くと言いだして、その騒ぎで立ち消えになってしまったのか、このところずっとそうした話はなくなっていた。母がこのあいだ言ったことだが、あと一年で大学院の修士課程も卒業ということになると、そろそろ話を決

めておかなければ、それこそおばあさんになってしまうのではないか。父は彼女の顔を見るとおきまりのように、早くお嫁に行かないとオールド・ミスの売れ残りになる、大学院などはいいかげんによしたほうがいいと言ひ（それでいて父は、知人、友人には、うちの娘は大学院へ行つて、わしよりえらくなるつもりでいるらしいですよ、とうれしそうに言うのだつた）、聖子は聖子で、お嫁に行くのはまだ早すぎるわ、まだ若い身で子供が四人なんていやよ、と、ことを返すのだが、それでいて、すでにかたづいてしまつたクラスメイトの幸福そうな顔が自然に浮かんできて何やらさびしげな気持ちになる。

スター・サファイアを持つて来たのは宝石部の石本さんだつた。石本さんは週刊誌のグラビアに出たことのある「その道三十年」のベテランで、かつぷくがよく、下手をすると父の社の重役に見まぢがえられかねない。父の室には冷房がよくきいているのに（父はいつも厚手のシャツを着ていた）、入つて来るなり「暑おまんなあ」と大声で言つて大きな扇子を出した。その扇子は彼が入りしている有名会社の社長や重役が署名した自慢の白扇だが、肥つた体をゆさぶるようにして懸命にあおいだ。「指環はお嬢さんので？」「ちがう、ちがう……」と言つて父が口ごもると、それなら万事心得ていますというふうには石本さんはうなずき、すばやくブリーフ・ケースを開いた。父は財界では名うての愛妻家を通つていたから、その「ちがう、ちがう……」ですべては判つたのだらう。

「どないしはつたん、頼子さん？」

母のなめらかな指が動いて番茶を入れた古九谷が聖子の手もとに來た。聖子はふと嗚咽しそうになつて、あわててその長細い茶碗を手にとつた。

「自動車事故で……」

番茶はおいしかった。おいしいと、聖子は思った。

「ほんと、それ……それはお気の毒に……」

しばらく間をおいてから母はつづけた。

「お葬式は？」

「あさつて、二時から。……お通夜は今夜やりはるらしいけど、身内の人だけでやりはるらしいの。さつちゃんがそんなふうに言うてはつた……」

「もうおそいからね」

母は聖子の逡巡をふっ切るように強く言つて、自分もお茶をのんだ。

「お葬式には、やはり、着物きて行きはつたほうがいいんとちがうかしら……」

母は考え込むような表情になった。

「近江先生のお葬式のときも思つたんやけど、もうセーちゃんも和服の喪服が似合う年ごろになつたんね。君子さんのときも着物にすればよかつた」

君子は母の妹で、ずっと腎臓をわるくして長く寝込んでいたのだが、去年のちょうど今ごろに<sup>ひら</sup>かた方の自宅で亡くなった。そのときには和服ではなくて黒のビロードのドレスにしたのだが、そのあと半年たつて子供のときのピアノの先生だった近江先生が胃癌で亡くなったときには和服にした。その和服は実際よく似合つて、聖子が自分でそう思つたばかりでなく、同じお葬式に来ていた恵子も「今日のお葬式の白眉は年増部ではもちろん私、若手部ではさすがにセーちゃん」と言つて笑つた。

聖子にはもともと黒が似合うのかも知れない。彼女の顔は細面で痩せていて、どちらかと言えば、さびしげな感じなのだが、黒を着るとかえって華やいで見えた。もう少し肥って肩のあたりの肉づきがよくなると（ということは島内家の伝統に従うと結婚して数年経つてからということになるが）、黒のイブニング・ドレスがよく似合うにちがひなかった。聖子の肌は荒れ性だが色は白くて、そのとき黒と白の対照はみごとだろう。聖子はときどきそうした自分の姿を想像してみることがあった。イブニング・ドレスなら彼女のスタイルの最大の難点である脚は見えない。聖子の脚はけっこう長い上にかなり細くて、それ自体けつして不恰好なものではないはずなのだが、頼子もさつきも、人一倍かたちのよい脚の持ち主なので、二人と並ぶと聖子の脚はふくらはぎのあたりがどことなく頼りなげにたるんで見えないこともなかった。さつきは頼子のお葬式にも洋服を着て来るだろうが、近江先生のときにも彼女は黒のカシミアのドレスを着ていて、それはそれでよく似合っていた。「洋装部」のなかでの「今日の白眉」は文句なしに彼女だっただろう。小柄でどことなく男の子のような感じのする体つきのさつきは年よりもはるかに若く見えて、そうしたフォーマルな装いをするとかえって若さが目立ち、子供が一人いる三十近い女であるとは決して見えなかった。近江先生の高弟だった彼女はお葬式の進行係のような役目をつとめていたが、その仕事ぶりはみごとで、「あのきれいな人はどなたはんでつか」と感心したように聖子に訊ねる会葬者までいた。人間は働いているときがいちばん美しいとよく言われるが、実際、そのとき、てきぱきと葬儀屋と家族のあいだに立って働く彼女の姿はほんとうに美しく見えた。

「さあ、もう泣かんと……」

いつのまにか聖子の頬に涙が流れ出ているのをめざとく見つけると、母は聖子の掌にハンカチをにぎらせた。

「泣いてもしょうのないことやし……」

ハンカチを眼にあてると、それがかえって新しい悲しみをそそったように、聖子は激しくしゃくり上げた。

「パパが起きて来はる」

「パパは……」

聖子は嗚咽を鎮めようとして無理に声を出した。

「このあいだ頼ちゃんに会うたと言うてはったわ」

母はうなずいた。聖子はつづけた。

「会社で……会社の誰かを訪ねに来はったところに玄関でばったり……」

母はうなずき、それからしずかに言った。

「頼子さんとか、弟さんと妹さんと三人やった？」

今度は聖子がだまつてうなずいた。

「弟さんって、今、防衛大学に行つてはるのやろ？」

「防衛大学じゃないの、防衛大学校と言うんです」

「どこにあるの、その大学校は？」

「横須賀の近くらしいわ」

聖子は和人からきいた通りのことを言った。和人は今年の夏のはじめ、その頼子の弟の貴島誠を訪ねて「大学校」まで出かけたことがあった。

「防衛大学校というたら、軍人さんの学校じゃないの」

「自衛隊の学校よ」

「自衛隊というのは、軍人さんのことじゃないの」

「そう言えばそうね」

聖子は頼りなげに相槌をうった。

「それでも、あの学校出ると、理学士なんかになれるらしいの」

頼子の弟の誠が防衛大学校に入ったのは、京大の理科を受けてはねられ、浪人一年したあと、防衛大学校の入試がほかの国立大学より早くあるので試しに受けてみたら入ってしまった、それでそこに決めてしまったのだという話を頼子から聞いたことがあった。「それがもう今ではたいへんなの。姉さんなんか背骨に力が入っていない、防衛意識がないなんて、たいへん」その話を打ち明けてくれたのは三年前の秋のこと、そのときには誠が防衛大学校に入ってから半年経っていた。

「妹さんは高校？」

聖子はうなずいた。妹は裕子と言って、高校二年生だった。

「六甲学院に行っておいでなの？」

「それがちがうの。……府立の高校らしいわ」

「なんでまた、六甲学院へ行きはらなかったの」

聖子は頼子がいつか、裕子は学院なんてブルジョアの馬鹿娘の行くお嬢さん学校だと軽蔑して自分で府立の高校を受けることに決めてしまったと言っていたのを思い出し、そのことを口に出すと、母は感にたえたように言った。

「妹さんも面白い人ねえ」

高校に入ってから、頼子が、「なんや知らんけど、うちの妹、アカくなつたんとちがうやろか」と心配するといふよりはむしろ面白がつている口調で言ったことがあつた。「なんかよう知らんけど、高校生反戦革命者同盟とかいう組織があるらしいのね、それに入っているらしいの。ねえ、けつたいな一族やと思わない？ 妹はアカで反戦で、弟は自衛隊」頼子は愉快そうに笑つた。聖子も笑いながつたが、奇妙に生真面目な表情になつた。

しばらく黙り込んでいた母が、ふいに寒さを感じたように大島の襟を合わせるようにしながら、

「頼子さんのママはおいくつぐらい？」

「さあ、いくらなんでももう五十近いんとちがうかしら」

「若う見えはる人ね」

「そうね」

まだ頼子の一家が上野芝にいたとき、駅の近くのテニス・コートのをばを通りかかると、コートの中なかからラケットをもつた若い女が会釈すると思つたら、それが頼子の母親だつた。純白のショートが赤いアンツーカーの背景によく映えて、彼女はままだどう見ても三十まえの女性に見えた。「セーチャ

ん、ごぶさたね」彼女は手をふった。東京生まれの彼女はいつも東京弁で話していて、聖子は、聖子や母があらたまったときに話す擬似東京弁でないほんとうの東京弁に出会うといつもどきまぎするのだが、そのときもそうで、あかくなつて挨拶一つうまくできなかつた。

「どないしてはるかしら？」

「誰が？」

「頼ちゃんのパパ。……泣いてはるかしら」

「そら、泣いてはる」

母とのそうした子供じみたやりとりはふしぎに聖子の心をなごませた。聖子の涙はもう乾いていて、ようやく心に落ちつきが立ちもどつてきたように彼女は思った。

「もうおそいから寝なさい」

「寝られへん」

「薬あげるからね」

「トランクライザー？」

「なんや知らんけど、加藤さんがもつて来てくれはつた。ソ連へ常務の久米さんが行きはるときに、加藤さんがこれあげたら……」

「その話知ってる」

むこうの貿易公団相手の話が最後のところで暗礁にのり上げたとき、モスクワに派遣されていた常務の久米さんが秘書といっしょに会社の診療所の加藤所長から手渡されていたその薬を飲んだら、翌

朝寝すごしてしまつて大いにあわてたというのである。「もつとも遅刻したと言つても、ソ連人がいつもやっている程度の遅刻ですがね」それは父の室で母にスター・サファイアを選んだあとのこと、聖子が父と雑談していると久米が入つて来てソ連のことから話はいつのまにかそんなふうな思ひ出話になつていた。久米は大丸宝石部の石本とは対照的に痩せていて、その痩せた体を少しも動かさないうようにして笑う。「晩にこつちが連中を招待して、ホテルのレストランで飯をくつたときにその話をやつたんですよ。そしたら、たいへんなことになつた。今夜はこちらの薬、ソ連医学の精髓をなす薬品を飲ましてやるというわけで、つまり、ウオツカですよ。日ソ友好のためにから始まり、あなたの家の犬の健康のためにまで、いろんな理由をつけて、乾杯また乾杯。どれくらい飲まされましたかな。……社長、あなたはいいですよ、はじめから酒は飲まんというふれ込みやから。私みたいになまじ飲むと……」「それじゃあ、ソ連でも日本でも酒は飲まんということに社長命令でしてあげようか」父がそう言うと、久米さんは「それはあかん、あかん」と頓狂に叫んで笑つたが、そのときでも彼の体はほとんど動かなかつた。

母は自分で立ち上つて茶筒のひき出しを開いた。その大きなひき出しは「ママの魔法のひき出し」ということになつていて、実際そこからは何でも出てきた。爪切り。小さな鋏。メモ帳。切手。封筒。「速達」のハンコ。ポケット判の曆。お金の換算表。いつかの毛皮のコートの代金の受取り。小さな物指し。応急処置のしおり。子供のとき、いや今でもときどき聖子と恵子はひき出しのままで母に言うことがあつた。「開け、ゴマー！」

聖子はテーブルの上の魔法瓶のお湯をコップに入れて、ピンクのカプセルに入つた薬をのみ込んだ。

「ママは？」

「ママが飲んだら、ずうつと眠るやろうね」

母は笑った。寝つきの良いのが自慢の母は、車に乗っているときでもすぐ眠った。それが母の美容法だった。それと、ときどき思い出したようにやる、大阪の芝山ゆりかという美容学校の校長に教わった美容体操。

「それこそ眠れる森の何とかじゃないの」

王子が来て接吻する、その場面が聖子の心に自然に浮かんだ。

かすかに電話のベルの音がした。それがすぐとぎれると、お手伝いの友ちゃんの声が出た。聖子はまた軽い胸さわぎをおぼえ始めていた。

「もう、おそいのに……」

母はゆつくりと茶箆筒の上の大きな置時計を見上げた。十一時を二十五分すぎている。

「パパにでしよう」

聖子は早口に言った。

「それとも恵ちゃんからママへかな」

恵子はときどき東京の晴海はるみの公団アパートから十二時とか一時とか、そんな深夜の突拍子もない時刻に電話をかけて来た。恵子に言わせると、深夜は割引料金で彼女一家のような薄給の大学教師一家が大阪の上野芝くんだりまで電話をかけられる唯一の機会なのだそうだが、それにしても、たいがいがないでもない用件の電話で、たとえば、明日、夫のハーバード時代の先生のまた先生のえらい先

生（「なんという名前の人やのん」と聖子が訊くと、「それが知らんねん。義彦さんは教えてくれたけど、外人の名前やろ、忘れてしまうた。義彦さんにまた訊くとええんやけど、あの人、すぐ笑いはんねん。そやよつて……」）のパーティが都心のホテルである、それに出るのに何を着て行つたらいいか、このあいだのアフタヌーン・ドレスよりもずっと以前に大丸でつくつたグリーンのドレスのほうがいい自分には似合うような気がするが——そういつたことを聖子や母相手に長々と話す。最高記録は五十分。「電話代で家が建ちますがな」いつか恵子が家に帰つて来たとき母がそう言つと、「そやから良ちゃんとかみために家建てんと公団で辛抱してるんやないの」と恵子はすぐことばを返した。そのことばの底には、父から家を建ててもらつた二番目の姉の良子夫婦のことがあつたにちがいないのだが、母はそんなことは素知らぬげに大声で笑つた。それに恵子夫婦が家を建てないのは義彦の勝手な「独立趣味」（聖子は、実際、そんなふう義兄に言つたことがある）で、恵子と結婚したとき、家を建てるなり買うなりしてもよいという父の申し出を断つたのは実を言うと彼女のだ。断つておいて、しばらく目黒でアパート住いしたあと晴海の公団住宅の2DKに移つて、最近では、子供が二人でき、狭くて仕方がないと家に帰つて来るたびに恵子はこぼし、東横線の沿線に土地を探しているらしいのだが、そうになると、このごろいくらジャーナリズムで売れつ子になつてきたとはいえ大学助教授の義彦の手にあまるにちがいない。もちろん父がいくらかは出すのだろう、母がそんなふうなことを聖子にちらと漏らしたことがあつた。

「お嬢様にお電話です」

友ちゃんが廊下の外から声をかけた。聖子は不安げに母を見た。母も不安げに見返したが、それで

も聖子より早く訊き直した。

「誰から」

「貴島さんの弟さんからです」

聖子は立ち上った。

「もう寝たと言うてもろうたら」

「出てみるだけ……」

聖子は弱々しく言った。

「出てみるわ」

母もいつしよに立ち上ると、そばの衣紋かけにかけてあった和服用のコートを聖子の肩にかけた。

それはふんわりとして着心地がよかった。

「セーちゃんですか。姉が死にました。もうご承知だと思いますが……」

意外に落ちついた低い声が受話器の底からひびいてきた。聖子は、このまえ最後に会ったときの貴島誠の風貌を思い浮かべていた。それはこの八月末のある日の夕方のことだったが、梅田の街路を歩いていた聖子は、めずらしくはしゃいだ声で背後から「セーちゃん」と自分を呼ぶ弟の和人の声に呼びとめられておどろいてふり返ると、そこに弟と防衛大学の軍服、軍帽姿の貴島誠が立っていた。二人はそれから連れ立ってどこかへ行くというので、ほんの立ち話程度のことしかしなかったのだが、そうしたいかめしい軍服、軍帽のせいなのだろうか、久しぶりに会った聖子は、彼が防衛大学校へ入ってから二年というわずかな時日のあいだに、彼の容貌がまだあどけなさを頬の線のどこかに残し

ながら、ちょうどテレビ・ドラマでときどき見かける昔の陸軍や海軍の青年将校のようにひきしまつて、奇妙に老成した感じのするものになってしまつていることにあらためておどろいた。変化はそばの和人に比べると余計めだった。和人と貴島誠の年齢の差はわずか三歳にすぎなかったが、和人はまだまだ甘えん坊の坊やにすぎないのだろう。ことに貴島誠といるとき彼はいつになくはしゃいで、このごろめつたに聞いたことのない笑い声をたてたりするので、それだけいつそう彼の甘えは目立ったのかも知れない。実際、そんなふう二人でいると、貴島誠は和人の兄のように見えた。

「セーちゃん、お聞きになつていましたか、姉が死んだこと……」

声はますます冷静さを増してゆくように聖子には思えた。潮田さつきから電話があつたばかりだと彼女は息をつまらせながら答えた。

「お葬式はあさつてなんですつて？」

「そうだ、と彼は答え、同じ冷静な口調で、

「姉は自殺したんじゃないかと思うんです」

「……………」

「わざと、ぶつつけられるようにしたらいいんです……」

「誠さん、何でもまたそんなこと言いはるの？」

聖子は辛うじてそれだけを言った。

「姉は子供ができていたんです」

「どこに？」

と聖子は思わず上ずった声で言い、次の瞬間、それがいかにばかげた問いであるかに自分で気づいて、受話器を耳に押しあてたままあかくなつた。

「おなかのなかにです」

貴島誠はあくまで冷静だつた。サク、サク、サク、と何かを切りきぎざんで行くように切口上に述べる。聖子は彼が空軍のパイロット志望であることをふと思ひ出してゐた。ジェット戦闘機のパイロットに要求されるのは、単位で言えば何十分の一、何百分の一秒に相当する冷静さだと彼は頼子と聖子の二人に言ったことがあつた。「私なんかとうてい駄目ね」と頼子が言うと、「問題外やね」と彼は答え、それから「セーちゃんのほうがまだ見込みがあるかも知れません。セーちゃんの自動車の運転は頼ちゃんとはちがいますからね」と聖子を正面から見すえるようにじつと見つめた。

(誰の?) もう一つ愚問を発しようとする自分を聖子は懸命にこらえたが、それを見すかしたように貴島誠は、

「じゃあ、またお葬式のとときに」

と言つて一方的に電話を切つた。いや、貴島誠は一方的に切つたのではなかつたらう、聖子は受話器をかけるときのあのガチャリという音がきらいで姉たちや友人に口やかましく頼んでいつも、ワン、ツー、スリー、でいつしよに受話器をかけることにしていたのだが、そのとき、たしかにその凍りつくような音を耳にしなかつたから、聖子自身が彼よりも早く一方的に電話を切つたのかも知れない。受話器をかけたあと、聖子はしばらく電話のまゑに茫然と立つてゐた。もう一度ベルが鳴り始めるような気がしきりにした。もう一度鳴り出したら、やはり彼女は受話器をとり上げるにちがひなかつた。

つづきは製品版でお読みください。